

＝和歌山市 加太町＝

加太の青春拠点

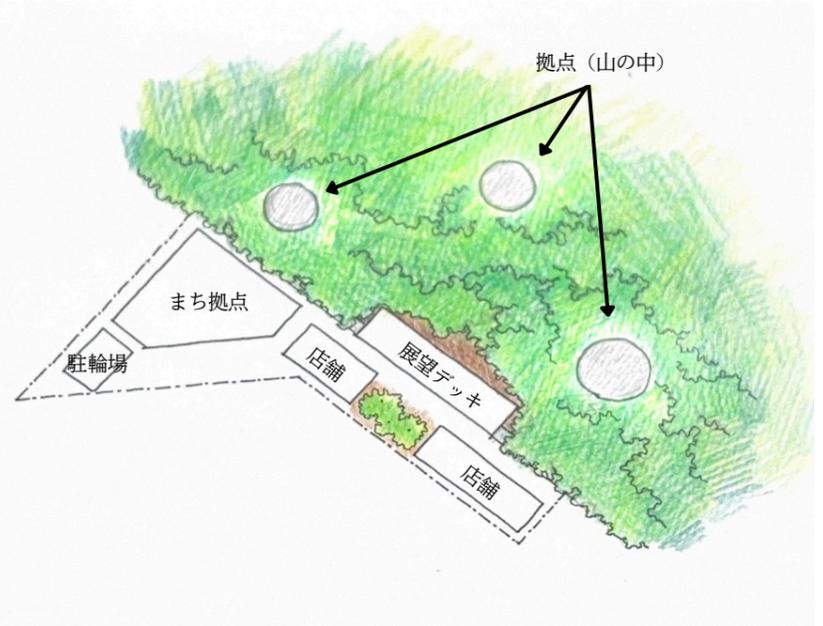
～人口流出を防ぐ、心的波止場～



生活科学科 生活科学専攻
居住環境コース2年
73-9024 高坪龍司

CONCEPT...

地方都市における若者の流出は、人口問題の中でも深刻な課題です。その背景には、学生時代に地域で過ごす「青春の記憶」が乏しいことにあると私は考えます。放課後に友達と語り合う場所、買い食いや勉強を通じて育まれる絆——そうした日常の体験が、将来の「帰りたい場所」としての原風景を形づくるのです。若者が「また帰ってきたい」と思えるような、青春の記憶を育む拠点を地域に設計すること、それは将来家庭を持ったときに「自分が育った町で子どもを育てたい」と思えるような、心の拠り所となる空間をつくることでもあります。そこで本構想では【小学生】と【中高生】の二つの世代に焦点を当て、彼らの心に残る体験を育む空間づくりを目指します。



PROJECT SITE...

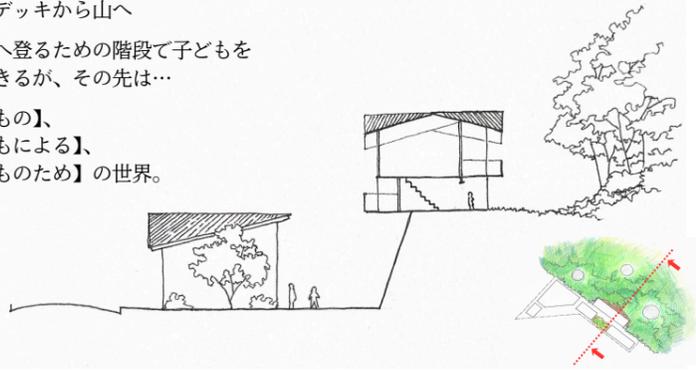
本エリアの周辺は、駅（東側）のほかに市役所や小中学校、郵便局（南西側）などの公共施設が集まっており、住民の生活を支える中核的な場所となっています。日常的に人の流れがあり、交流が生まれやすい環境が整っています。

～山に入る仕組みと迷わない工夫～

・展望デッキから山へ

デッキへ登るための階段で子どもを確認できるが、その先は…

【子どもの】、
【子どもによる】、
【子どものため】の世界。



・拠点（山の中）の存在

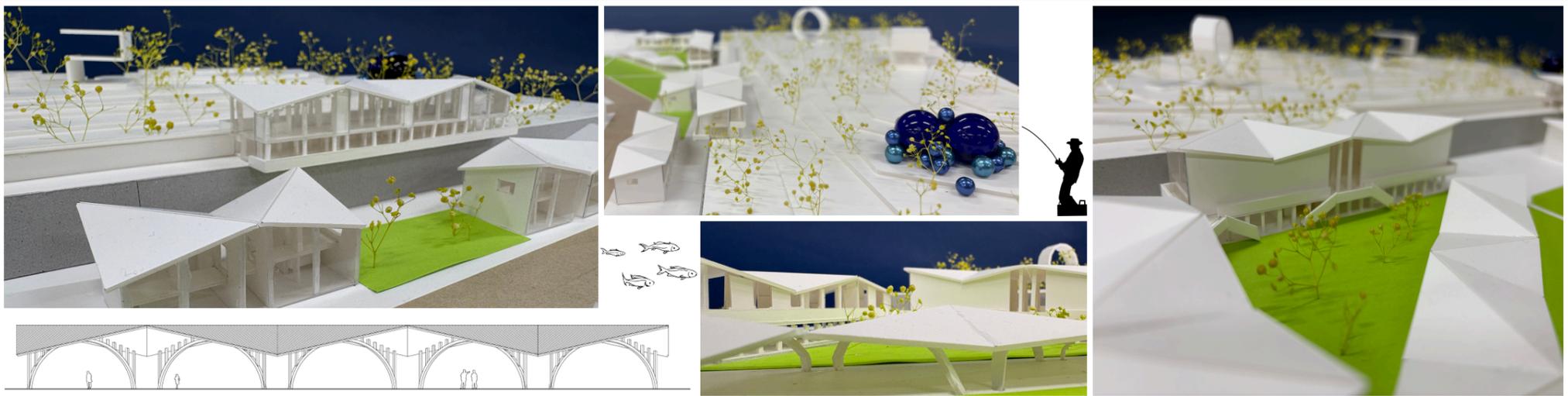
山で迷わないための目印として設置。また、目立つようにするためには、特徴的なカタチの必要がある。漁村である加太ならではのカタチを提案。

【魚のヒレ】
【巻目のラセン】
【ギョラン】



【小学生】「閉じた世界」…

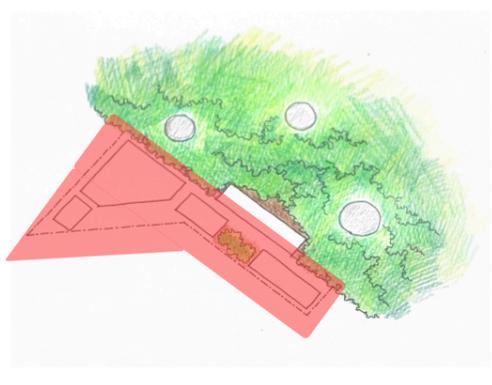
小学生時代の青春とは、駄菓子屋での買い食いや広場での遊び、山に自分たちだけの秘密基地をつくること、日記帳を交換してコソコソ話を共有することなど、日常の中にある小さな冒険です。特に後者のような行動には、親や先生といった大人の干渉を意図的に遮り、子どもたち自身が安心して心を開ける「閉じた世界」を求める欲求が表れています。見守りやすく開かれた空間は、むしろ大人の安心のための設計であり、子ども自身のための空間とは言い難いものです。少し暗くて狭い、大人にはたどり着けないような過干渉されないうところが、本当に必要な場所。そうした「子どもだけの閉じた世界」を意図的につくることこそが、小学生のための空間なのです。



【中高生】

「もう一つの居場所」…

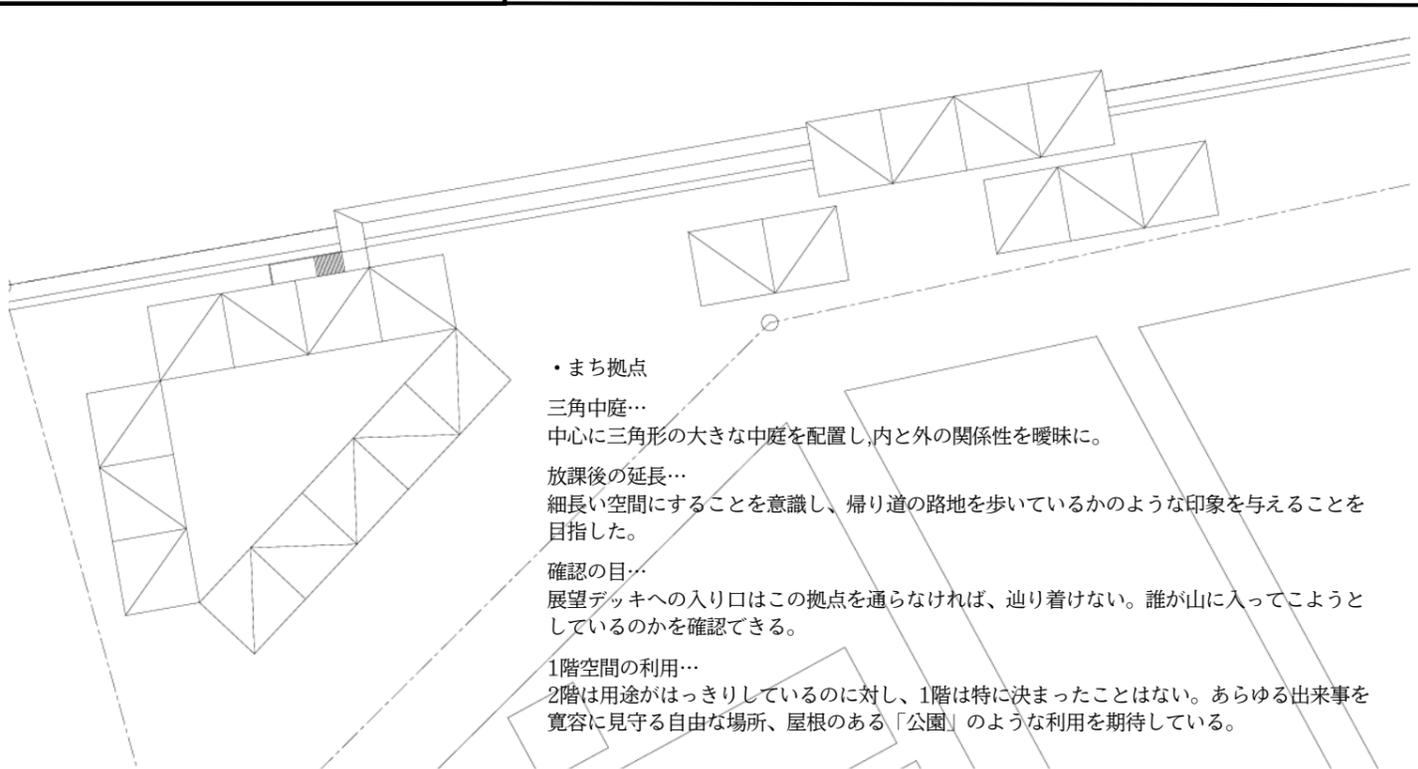
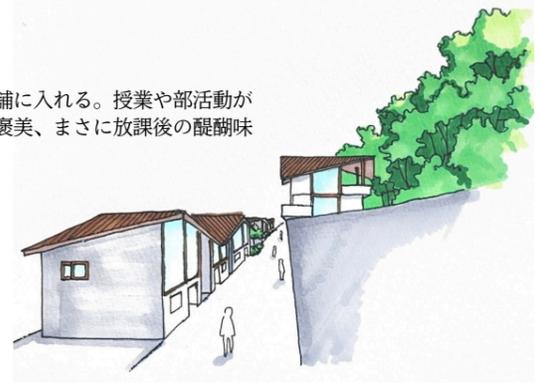
中高生時代の青春は、図書館での勉強会や喫茶店での何気ない会話、映画館やカラオケなど、勉強やお金を使った活動が中心です。これらの場所は、自宅や学校以外の「サードプレイス」として機能し、長時間滞在できる心地よい空間が求められます。休日の利用も考えられますが、こうした活動が放課後に行われることで、より強く記憶に残る経験になります。目的を持たずにふらりと立ち寄り、そこで何をするかを自分で決められるような自由で心地よい居場所、それが中高生にとって必要な空間なのです。



・買い食いロード

歩きながら食べられるようなものを店舗に入れる。授業や部活動が終わった後のちょっとした自分へのご褒美、まさに放課後の醍醐味である。

【駄菓子屋さん】、【揚げ物屋さん】、
【パン屋さん】、【たい焼き屋さん】、
【アイスクリーム屋さん】、etc.



・まち拠点

三角中庭…
中心に三角形の大きな中庭を配置し、内と外の関係性を曖昧に。

放課後の延長…

細長い空間にすることを意識し、帰り道の路地を歩いているかのような印象を与えることを目指した。

確認の目…

展望デッキへの入り口はこの拠点を通らなければ、辿り着けない。誰が山に入ってこようとしているのかを確認できる。

1階空間の利用…

2階は用途がはっきりしているのに対し、1階は特に決まったことはない。あらゆる出来事を寛容に見守る自由な場所、屋根のある「公園」のような利用を期待している。